

見土呂の宝篋印塔

みどろのほうきょういんとう



文化財愛護シンボルマーク

名称	見土呂の宝篋印塔	時代	南北朝時代／14世紀
別称	石造宝篋印塔、見土呂の石造宝篋印塔	所在地	加古川市上荘町見土呂441-2
数量	1基	所有者	見土呂町内会
寸法	高 245.8cm (基壇-相輪頂部) (基礎-相輪頂部高 225.3cm)	指定	加古川市指定文化財
材質	石造、凝灰岩(竜山石)製	指定分類	建造物
		指定名称	石造宝篋印塔
		指定年月日	平成 25 (2013) 年 2 月 28 日



見土呂の宝篋印塔

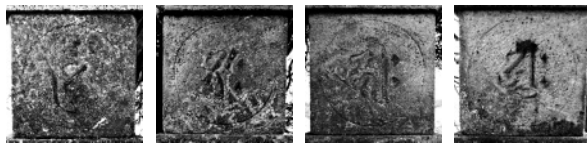
かみそうちよう みどろ たんぼ
上荘町の見土呂集落の西に広がる田圃の中に、よく固められた盛土があり、小さな茂みとなっています。その中に、地元では法憲塔と呼ばれている凝灰岩(竜やまいし ほうきょういんとう)製の大きな宝篋印塔が建っています。材質が柔らかいため表面が磨滅した部分がありますが、全体に南北朝時代の宝篋印塔の特徴をよく示しています。

宝篋印塔とは、基礎、塔身、笠、相輪からなる塔の一種で、笠を段形につくり、軒の四隅に隅飾を立てた形をしています。宝篋印塔という塔の名は、宝篋印陀羅尼の経文を納めたことから名づけられたといわれ、主に供養塔や墓碑として造立されています。






この塔は、二段の後補と考えられる延石の上に据えられています。

二枚に分けた厚さ 20.4cm 基壇は、上部が、各辺複弁三葉、各隅複弁の反花が彫出されています。

その上の基礎は、上端が二段で、側面は四面とも輪郭を巻き格狭間が彫られています。格狭間の中に開花蓮はありません。



ウーン アク キリーク タラーク
塔身部種子写真

塔身の四方には、月輪中に金剛界四仏の種子が彫られています。本来は、東面が  (ウーン、阿闍如来)、南面が  (タラーク、宝生如来)、西面が  (キリーク、阿弥陀如来)、北面が  (アク、不空成就如来) となるのですが、北側の正面に  (ウーン) があり、実際の方角とは右に 90 度ずれています。

笠は、下二段上六段の定型式で、隅飾りは少し外傾しています。



見土呂の宝篋印塔全景

相輪部は、2 箇所継ぎ直した痕がありますが、覆鉢、下の請花、九輪、上の請花、宝珠が一材で彫出されたものです。

この塔に関する伝説として、戦国時代に城山から落ち延びてきた武者がこの場所で切腹したというものがありません。

この塔は、欠損部分もほとんど無く調和のとれた美しい姿をしており、この地域の石材である凝灰岩製の宝篋印塔としては市内最古のものと考えられ、加古川市の中世の石造品として貴重なものです。

[各部寸法]

相輪部	高 92.5cm (宝珠 / 17.8cm、上の請花 / 8.5cm、相輪 / 46.8cm、下の請花 / 7.5cm、覆鉢 / 11.9 cm)
笠部	高 50.3cm、最大幅 62.5cm (隅飾り高 各 21.5cm)
塔身	高 32.6cm、各辺 33.3cm
基礎	高 50.0cm、各辺 65.0cm
基壇	高 20.4cm、各辺 102.5cm

(文・写真 / 宮本)

●参考文献

「文化財ニュース 56 号」加古川市教育委員会 (2013 年)

●キーワード

建造物、石塔、宝篋印塔、種子、見土呂、みどろ、みどろ、凝灰岩、竜山石

●所在地 / 加古川市上荘町見土呂 441-2

●交通 / JR 加古川線「厄神」駅から北へ徒歩 20 分または JR 加古川駅南口発神姫バス「都台」行「都染」バス停から北東へ徒歩 5 分
車は東播磨南北道路「八幡稲美ランプ」から北へ 2.5km